

Title	「を」の気脈：『源氏物語』の句読と異同
Author(s)	加藤, 昌嘉
Citation	語文. 2004, 80-81, p. 33-42
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/69023">https://hdl.handle.net/11094/69023</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# 「を」の気脈

——『源氏物語』の句詠と異同——

加藤 昌 嘉

『源氏物語』の或る一本に拠りその忠実な現代語訳を試みていると、どこで句詠を切りどこに鉤括弧を付すべきか、いわばその文構造をどう捉えたらよいのか、判断に窮することがまゝある。汗牛充棟の研究書を繕いてもそうした疑問が氷解することは稀なので、なおさらその違和に眩惑され魅了され、平安和文の気脈を何とか理會したいという思いに駆られることになる。萩原広道が「語の脉」<sup>「語の脈」</sup>「三尔乎波の首尾」を視覚化することに努め、佐伯梅友が「どこにかかるか」と問い続けていたのを見るにつけても、<sup>(1)</sup>『源氏物語』を読むとは、そういう宮為であったのだと改めて感得される。

## 一 「思つきせぬ事どもを」

例えば、次の文章は、如何なる気脈を成してあるか。

【A】中宮の御方に参りたまへれば、人々めづらしがり見たてまつる。命婦の君して、「思ひ尽きせぬことどもを、ほど経るにつけてもいかに」と御消息聞こえたまへり。

(新編日本古典文学全集「葵」巻 六七頁)

葵上を喪い忌に籠っていた光源氏は、久々に父桐壺院の御前に参

り、続いて藤壺中宮のもとを訪れる。傍線部は、王命婦を介して光源氏に伝えられた藤壺の言で、新編日本古典文学全集は、「この私も悲しみの尽きぬ思いの数々ですが、時がたつにつけてもどれほどにかお寂しく」と訳出している。なぜ、「を」が「ですが」に変換されるのか、首を傾げざるを得ない。「ことども」という体言に接続しているのだから、まずは格助詞と認め、「いかに」以下に「かなしうおぼすらむ」「さびしからまし」「わびしからむ」といった述語用言が想定されるのだから、「物思いの尽きない諸々の悲傷事を、月日を経るにつけて、どんなにか辛くお感じになつておいででしょう」と訳すべきではないのか。この直前でも、朝顔齋院が「秋霧に立ちおくれぬと聞きしよりしぐるる空もいかがとぞ思ふ」という歌を贈り、女房が「言ふかひなき御事は、ただかきくらす心地しはべるは」と述べていたのと同様、藤壺も、葵上を亡くした光源氏に、平慰の言葉をかけたに過ぎないのではないか。

実はこのくだりは、昭和の或る時期までは、「尽きせぬ御愁傷の御事、日が隔たるにつけても如何ばかり」と、正確に訳されていた。しかるに、『青表紙本』諸本では「事ども」に「御」が付いていな

いということ、日本古典文学大系や『全釈源氏物語』あたりから「思ひ尽させぬことども」は光源氏でなく藤壺自身の愁嘆を指すと解するようになったのである。当然、文脈が捻れるが、例えば日本古典文学大系は「事どもを。」と句点を打ち、角川文庫は「今も悲しく存じますことですもの。」と訳すなど、「を」を詠嘆の終助詞のごとくに処理している。しかし、なぜ藤壺がそこまで葵上の死を悲しむのか、やはり判然としない。或いは、「ども」に、密通をめぐる苦悶まで籠められているというのだろうか。「御」がないことを重視するあまり、ここが浮き上ってしまいうように思われる。<sup>4)</sup>

では、次のような本文であったら、どうか。

【B】中宮の御かたにもまいり給へれば、人々めづらしがり見たてまつる。みやうぶのきみして、「おもひつきせぬ御事を、ほどふるにつけても、いかに」と、御しようそきこへ給へり。

(各筆本「葵」巻 五四ウ)

【C】中宮の御かたにもまいり給へれば、人々めづらしがり見たてまつる。命婦の君して、「おもひつきせぬ御事、ほどのふるにつけても、いかに」と、御せうそきこへ給へり。

(陽明本「葵」巻 五七ウ)

【B】各筆本(御物本)は「御事を」としているので問題は解消する。また、【C】陽明本には「御」があり「を」がないので、「御事」は体言止め、もしくは無助詞の目的語として「いかに」以下に掛かることとなり、やはり問題は解消する。にもかかわらず、諸注釈書がこれらを参照して「御」を補わないのは、各筆本・陽明本の「葵」巻は(別本)であり、他にかような本文を持つものが見出せないからだろう。とりわけ新編日本古典文学全集と新日本古典文学

大系は、『青表紙本』以外の諸本を用いては底本を改訂しないという方針を貫いている。なるほど、それなら、いっそのこと、次のような処理をすればよかったのではないか。

【D】中宮の御かたにまいり給へれば、人々めづらしがり見たてまつる。命婦の君して、思ひつきせぬ事どもを、「ほどふるにつけても、いかに」と、御せうそきこえ給へり。

(大島本「葵」巻 四八ウ)

右のごとく、「思ひつきせぬ事どもを」を鉤括弧の外に出し、「ほどふる」から「いかに」までを藤壺の言とすれば、「を」は「きこえ給へり」に掛かってゆく格助詞となり、「御」の有無を云々する必要がなくなる。この場合、「事どもを」の後にもう一つ「御せうそこ」という目的語が存することになるが、「を」は「くについて・くに対して」という掛かり方をするものと見ればよからう。<sup>5)</sup>「古典の本文は、その誤謬が明証されないかぎり、異文によって改変すべきではな」く、「所与の本文は、それ自体として、徹底的に考究されるべきである。」<sup>6)</sup>ということである。

## 二 「所せき身のほどを」「みすてがたきはまのさまを」

近藤泰弘「上代語における助詞「を」の分類」および「接統助詞「を」の発生時期」<sup>7)</sup>は、意味・解釈の問題をひとまず括弧に入れ、形態・構文の面から「を」を分類する点、周到にして明瞭であり、この助詞を考える際の指標となるべき論稿と目される。その論旨を、以下に要約しておく。

### ◆上代文献における「を」

【1】格助詞「対応する述語用言があり、目的語となっている体言

(準体等を含む)を承けているもの。」

【2】終助詞「対応する述語用言が存在せず、単独で体言・連体形等を承けているもの。」

【3】間投助詞「広義の連用に続き、文末が意志・命令・願望など特殊なムードになるもの。和歌に用いられる。」

◆中古文獻における「を」

【1】格助詞

【2】接続助詞「上代で終助詞と呼んだもの。体言十を、連体形十を、連体形十もの十を、という環境に現れる。」

【3】間投助詞

特徴的なのは、間投助詞を連用成分の直後に現れるものだけに限定した点、および、上代で終助詞と呼んだものと中古に現れる新しい形ものを併せて接続助詞とした点である。この区分を筌蹄とすると、論点は、格助詞なのか接続助詞なのか、すなわち、「を」に対応する述語用言があるか否かの識別に絞られて来るだろう。そして、その判断こそが最も難しい。

例えば、次の「を」は、どう捉えるべきだろうか。

【E】たとしへなくのどかにおぼしをきて、<sup>1</sup>「まちどをなりと思らむ」と心ぐるしうのみ思やりたまひながら、所せき身のほどを、さるべきついでなくて、かやしうかよひ給べきみちならねば、神のいさむるよりも、わりなし。

(明融本「浮舟」巻 二ウ〜三オ)

浮舟を宇治の邸に囲いながらも、思うように逢えぬ薫の心情を表したくだり。傍線部の「を」を、諸注釈書は「〜ので」「〜から」「〜こととて」と訳しているが、疑問である。「所せき身のほどを」

は、末の「わりなし」と対応していよう。「を」は、格助詞と認むべきものである。形容詞・形容動詞が格助詞「を」を承ける述語用言たり得ることは認知されていないのかも知れぬが、ここでいえば、窮屈な身分を「わりなしと思す」「わりなく思す」と取るのである。例えば「角川古語大辞典」の「を」の項などを参照されたい。平安和文にあつては、「いはけなくおぼゆ」ではなく「いはけなし」、「さがなくおほして」ではなく「さがなくて」、「惜しげに見え給ふ」ではなく「惜しげなり」と表現される、と説いていた今泉忠義の論稿が想起されるところである。

或いはまた、次の「を」は、どう捉えるべきだろうか。

【F】わかき人<sup>2</sup>の、いぶせう思ひしづみつるは、うれしきものから、みすてがたきはまのさまを、またはえしもかへらじかしと、よするなみにそへて、そでぬれがちなり。

(大島本「松風」巻 七オ〜七ウ)

明石御方と姫君が光源氏に引き取られる仕儀となり、それに伴って明石を離れることになる若い女房たちが、悲喜交々の思いを抱く場面。文脈を見やすくするために、鉤括弧を付してみた。「うれしきものから」は、「そでぬれがちなり」と逆接の関係になるので地の文と判断できる。が、「みすてがたきはまのさまを」はどう処理すべきか。佐伯梅友は、「みすてがたき」から「かへらじかし」までを鉤括弧に入れ、「さまを。」と句点を打って、「この場合の」を「は詠嘆の終助詞であつて、格助詞ではない」という。しかし、先の【D】のごとく、この「を」は、「〜に対して・〜を見て」という形で末句に掛かっているとは考えられないだろうか。「そでぬれがちなり」は、一種の形容動詞のごとく、述語用言に相当する役

割を担っているとはいえないだろうか。よって、「またはえしもかへらじかし」のみを鉤括弧に入れるのが穩当と思われる。

体言接続の「を」が、心内文や会話文を跨いで、述語用言らしき句に掛かる文型は、『うつほ物語』にも見出すことができる。

【G】ともかくもいはず、よはりたるけしきを、「今は、また、いなどのたまふとも、御心にまかすべきにもあらず」と、たゞいそがしにいそがして、きぬとり出てきて、そゝのかし給へば、あれにもあらずながら、出たつ。

〔俊景本宇津保物語の研究1〕「俊蔭」巻 九四〇(九四ウ)うつほに暮す俊蔭の娘と仲忠を見つけ出した兼雅が、二人を京に引き取るべく促している場面である。「よはりたるけしきを」とは俊蔭の娘が逡巡する様をいうが、その「を」は、決して接続助詞でも終助詞でもあるまい。これも、「ゝに對して」とでもいい換え得るような格助詞であり、「いそがして」「そゝのかし給」に掛かっていると判断される。「ゝけしきを(見て)」とか「ゝけしき(の俊蔭の娘)を」とかいう補いをして訳さねばならないが、かような語法もあるのだということは記憶に留めておきたい。

### 三 「を」の揺動・明滅

それにしても、【E】がもし「身のほどなるを」「身のほどの所せきを」とあったら、【F】がもし「はまのさまなるを」「はまのさまのみすてがたきを」とあったら、「を」は、さしたる考慮もなく「くだが」「ゝので」と訳されただろうと思われてならない。しかし、そうした異文は存在しないのである。

山口明穂は接続助詞「を」を解説する中で、『万葉集』一五五五

番の「いくかもあらねば」が、『拾遺集』一四二番には「いくかもあらねど」と載り、それが『詠歌大概』では「いくかもあらぬを」と引かれた例を挙げている。<sup>(1)</sup>「は(盤)」と「と(登)」は誤写される可能性があり、また、通行の『詠歌大概』本文では「あらねど」となっている。再調査を要する指摘ではあるのだけれども、助詞はどのように変容し得るかという視点そのものは興味深い。『源氏物語』諸本の場合、本文の先後関係が不明である分、「を」の異同は、同一平面上の揺れ動きとして捉えられるだろう。

諸注釈書の底本たる大島本・明融本と、『河内本』(別本)と呼ばれる尾州本・高松宮本・保坂本・陽明本などを校合してみると、助詞「を」と交替し得る主なものは、接続助詞の「に」「ば」「ど」「格助詞の「と」「の」、係助詞の「は」「も」、および、「をば」「ものを」「×(無助詞)」であることがわかる。当然のことながら、文意が変らない場合もあれば文意が逆になる場合もあり、また、文脈そのものが別物になる場合もある。ただ、いずれにあって、文意不明となるものは尠く、各々、解釈可能な本文を伝えていていると思しい。それだけに、中世期の『源氏物語』諸本を横断するような国語学的考察が俟たれるところである。以下、その捨て石として、注意すべき「を」の異同を取り挙げてみたい。

【H】なみ／＼の人にもものし給はねば、かたじけなう心ぐるしうて、かう思たちになるを、おやなど物し給はぬ人なれば、

(大島本「東屋」巻 六六)

浮舟の母君の発話である。大島本など諸本が「給はねば」とする箇所を、陽明本は「給はぬを」(五ウ)とする。男君が「なみ／＼の人」ではいらっしやらないということと、母君が「かたじけなう

心ぐるしう」思うことは因果の関係になるため、「ねば」も「ぬを」も共に「ゝので」という順接として働いている、と見る向きもあろうが、「給はぬを」は「かたじけなしう心ぐるしう」という形容詞に掛かってゆくので、「を」は格助詞と考えるのが妥当だろう。また、諸本が「たるを」とする箇所は、陽明本では「たる」とある。ただ、直後に「をや（親）」があるので、連体中止か連体修飾かという以前に、「を」か「ゝ」が脱落している可能性もある。

【I】今はかぎりと思し程は、戀しき人おほかりしかど、こと人、はさしもおもひいでられず、（大島本「手習」巻一三〇）  
蘇生後の浮舟の心境を表したくだりである。大島本など諸本が「しかど」とする箇所を、歴博本は「しを」（二六ウ）、保坂本は「しをいまは」（二六オ）とする。この場合、「ど」と「を」が同意であるか否かが問題となる。前句では入水を決意した時分のことを、後句では再び生を得た現在のことを述べており、また、「を」が掛かる述語用言は、これ以降にも見当らない。よって、この「を」は「ど」と等しく逆接の接続助詞として働いていると見られる。保坂本では「いまは」とあって、対比がより顕著になるろう。

【J】まして、ひるよなうおもひ給へまどはれ侍心を、えのどめ侍らねば、人めもいとみだりがはしう、

（大島本「葵」巻四四ウ）

葵上を亡くした父左大臣の心内である。大島本など諸本が「心をえのどめ」とする箇所を、陽明本は「心をばのどめ」（五二ウ）とする。これは、「を」と「をば」の交替というよりも、或る段階で「え（衣・盈）」と「は（者）」との誤写が起ったと考えるべきものだろう。ただ、双方、文脈は通っている。

#### 四 「いとうれしき事にもはべるを」

以上は、異同があっても文意が変わらない諸例であったが、一方、「を」の揺動によって、論理が微妙に異なって来る場合もある。

【K】宮も、かの人ちかくわたしきこえてんとする程のことども、かたらひきこえ給を、「いとうれしきことにも侍かな。あいなく、みづからのあやまちとなん思ふたまへらるゝ。あかぬむかしなのごりを、またたづぬべきかたも侍らねば、おほかたには、なにごとにつけても、心よせきこゆべき人となん思ふたまふるを、もしびなくやおぼしめさるべき」とて、

（大島本「早蕨」巻五ウ六オ）

大君を喪った鬱憤を吐露する薫の前にし、「宮」|| 匂宮も、中君を京に移すべき用意のことなどを口にする、薫が「いとうれしきこと」と、中君に対する心情を語りはじめる、という場面。諸本が「給を」とする箇所を、陽明本は「給に」（六オ）とする。接続助詞「を」と「に」の交替比率は高く、また、ここを「ゝので」と訳すか「ゝと」と訳すかは注釈者の匙加減によるから、「給を」と「給に」の相違については今は考えない。「いとうれしき」以降から薫の発話になるがゆえに、「給」という終止形ではなく、「を」「に」という主語転換を示す記号が置かれたということである。

問題は、鉤括弧内の文脈である。「いとうれしき」は、中君が京の匂宮邸に引き取られることを喜ばしく思う気持ち、「あいなくゝ」は、匂宮を手引きした結果、中君が空闊を託つことになっている責任を感じる気持ち、と解せようが、しかし、「あいなくゝらるゝ」の処理が難しい。新潮日本古典集成や角川文庫は、これを後

句に続け、「あかぬむかし（故大君）のなごり」を修飾するものと解しているのだけれども、ここには係り結びがあるので、「らるゝ」と句点で切るのがよい。「あいなくゝ」は、「あなたを前にして」具合が悪くも、（中君の現在の心労は、あなたを紹介した）己の失敗ゆえだと思われるだけに。」というような意で、前文「いとうれしきことにも侍かな」を倒置的に理由説明していると考えられる。保坂本が「られつる」（五ウ）としているのが参考になるが、薫は己の所為を「あやまち」と感じている（た）がゆえに、今、中君が京を迎えられることとなって嬉しい、という論理である。

一方、陽明本では、本文は、次のようにある。

【L】みやも、かの人ちかくわたしきこえてんとするほどのことゝもかたらひきこへ給に、「いとうれしき事にもはべるを、あいなくみづからのあやまちとのみ思給へらるゝ。おほかたも、あかぬむかしのなごりも、又たづぬべきかたもはべらねば、なにことにつけても心よせきこゆべき人となん思給ふるを、もしびんなくやおぼしめさるべき」とて、

（陽明本「早蕨」巻 五ウ六オ）

この場合、「はべるを」は「思給へらるゝ」という述語用言に掛かってゆくだろう。また、意味上、「らるゝ」と「おほかたにも」の間に句点を打たねばならないだろう。よって、「洵に嬉しい事でもあります（中君が京に引き取られる）件を、嫌なことに、自分の失策だとばかり感じてしまう。」と訳せばよいだろうか。「を」は格助詞と目される。陽明本における薫は、中君が匂宮邸に入居するという、そのことを、「あやまちとのみ」感じる、と述べているようである。匂宮に中君の世話を託すことを忝なく思うという弁である

とともに、中君が確実に匂宮のものとなってしまふことを悔やむような気持ちが滲んでもいようか。

## 五 「うしろめたげなる御けしきを」

或いはまた、「を」のみならず、その前後にも大きな異同があって、通行の解釈とは異なる文脈を成している場合もある。

【M】憂き世にはあらぬところのゆかしくて背く山路に思ひこそ入れ「うしろめたげなる御けしきなるに、このあらぬ所求め給へる、いとうたて心うし」と聞こえ給。

（新日本古典文学大系「横笛」巻 五〇頁）

朱雀院から春の山菜を添えて文が贈られて来たのに対し、六条院で出家生活を送る女三宮が、返歌をしたためるくだり。新日本古典文学大系は、「うしろめたげなる」から「心うし」までを光源氏の発言と取り、「気がかりに思っいらっしやる院のご様子なのに、こうして「ちがう所」をお求めになっているとは、えらく嘆かわしい」という訳を付している。「御けしき」は朱雀院の御様子、「に」は接続助詞ということなだろう。さて、傍線部は、保坂本では「御けしきを」となっており、『源氏物語別本集成』によると、麦生本・阿里莫本には「御けしきに」とある由である。ただ、保坂本にあっては、異同はそれだけに留まらない。

【N】「うきよにはあらぬところのゆかしくてそむくやまちにおもひこそいれ。」いとゞ世をいかにおぼすなりにけるにか」とうしろめたげなる御けしきを、「このあらぬところもとめたまへる、いとうたて、こゝろうし」ときこえ給。

（保坂本「横笛」巻 三ウ四オ）

保坂本には、波線部のごとく、一九字にも及ぶ一節が存在する。

語順が落ち着かないが、「一人、この世を、どんなにか（辛く）お  
思いなさるようになったことか」と訳してみる。これは、女三宮が  
歌の末尾に書き添えた朱雀院への一言であろうか、或いは、女三宮  
の歌を見た光源氏の感想であろうか。いずれにせよ、「とうしろめ  
たげなる御けしきを」は地の文となり、「御けしき」は女三宮の様  
子ということになる。その場合、「を」は、先に見た『うつほ物語』  
の例【G】と同じく、「し」に対して・しに向かつて」という形で  
「きこえ給」に掛かる格助詞と判断できよう。」と案じられる御様子  
（の女三宮）に對し、「し」という意である。

しかし、顧みれば、角川文庫は、【M】の本文に基づきながらも、  
他の注釈書とは異なり、「出家にはむかない御様子なのに」と訳出  
していたのであった。大島本にあっても、「御けしき」は女三宮の  
様子と解し得るということである。もしくは、「うしろめたげなる  
御けしきなるに」を地の文と取るべきだったかも知れない。保坂本  
の存在によって、通行の解釈が再考を迫られている。

## 六 「さらばこのわか君を」

或いはまた、「を」そのものは不変でありながら、後句に小さな  
異同があるため、対応する述語用言が変る場合もある。

【O】君も、「猶かくてはえずさじ。かのちかき所に思たちね」と  
すゝめ給へど、つらき所おほく、心見はてむものこりなき心ち  
すべきを、「いかにいひてか」などいふやうに思ひみだれたり。  
「さらば、このわか君をかくてのみはびなき事なり。思心あれ  
ばかたじけなし。」（大島本「薄雲」卷 一オ）

大堰の山荘で寂寥たる日々を過す明石御方は、「君」〓光源氏か  
ら二条院東院に移るよう勧められるものの、なおも躊躇している、  
すると光源氏は、せめて「わか君」〓明石姫君だけでも京に呼び寄  
せ紫上の養女に迎えたいと、次なる提案をしはじめる、という場面。  
傍線部に對し、諸注釈書は揃って、「この若君を。」と句点を打って  
いる。『全光源氏物語』が、「若君を」の下に「移し給へ」などの  
省略があるものとして解したと説くように、「さらば、この若君  
を。」とでも書記すべきなのだろう。この場合、「さらば」がある  
ので、「を」は、「し」だなあ「し」のに」といった詠嘆ではなく、格  
助詞と認むべきものである。

だが、次のようにあると、文の関係を別様に考えねばならない。  
【P】「なを、かくてはえあるまじ。京のちかきところえ」などすゝ  
め給へど、つらきところおほくみはてんも、のこりなきこゝち  
すべきを、「いかにいひてか」などいふやうにおもひみだる。  
「さるはこのわかきみをかくてもみはいとひない事なり。おも  
ふところもあれば、かたじけなし。」（天理本「薄雲」卷 二オ）  
天理本（畊雲本）の本文である。傍線部は、「さるは、この若君  
を、かくても見ば、いと便ない事なり。」と漢字を宛てることがで  
きよう。「そうはいっても、姫君をこんな状態で世話していたら、  
洵に宜しくない事になる。」と訳せばよろしいか。わずかに「の」  
と「も」の違いだけで「見ば」という述語用言が出現し、一続きの  
文として把握できることになる。いずれも格助詞ということに変わ  
りはないものの、対応する述語用言が秘されているか顕在しているか  
によって、句読法が異なって来るわけである。

とはいえ、他の『源氏物語』諸本は皆、「かくてのみは」という



本文を改変することなく伝えている。しかも、大島本や尾州本など句読を施す写本では「わか君を」の下には何の点もなく、古注釈でも「を」の下に省略があるとは説かれていない。となると、「わか君を」を後句に続け、「かくてのみ」と「は」の間に「置く」「見る」などの述語用言を補って読まれていたことになるのだろうか。

## 七 「いとらうたかりし人を」

ここまで、「を」が体言に付いていようと連体形に付いていようと、まずはどこかに掛かる格助詞と捉え、それが認め難い時に限って「ゝのに」という接続助詞と判断する、という基本的立場を崩さず読解を行って来た。従来、体言に接続していながら「ゝだが」と訳されて来た「を」も、概ね格助詞として解し得ることがわかったわけだが、ただ、やはり読解に窮する文脈もあって、とりわけ本文異同がなく、古注釈も問題視していない場合には、拱手を余儀なくされ、平安和文と現代人との如何ともし難い懸隔を痛感する。

【Q】重りかなる方ならで、ただ心やすくらうたき語らひ人にてあらせむと思ひしには、いとらうたかりし人を。思ひもていけば、宮をも思ひきこえじ、女をもうしと思はじ、ただわががありさまの世づかめ愈りぞなど、ながめ入りたまふ時々多かり。

(新編日本古典文学全集「蜻蛉」巻 二六一頁)

浮舟を匂宮に奪われ、果てはその浮舟に先立たれた薫が、過往を振り返りつつ、己の至らなさを噛み締めているくんだり。傍線部「らうたかりし人」とは浮舟のことだが、新編日本古典文学全集は、「人を」と句点を付し、「まったくい」といふ女だったものを」と訳出している。ここには、直前の「ゝ」と思ひしには」が掛かっており、

また、直後の「思ひもていけば」は「宮をもゝ」に繋がってゆくので、やはり「を。」と切らなければ文脈が捻れてしまうだろう。右の訳は、格助詞とも接続助詞とも詠嘆終止ともつかぬ形で、「を」の風合をうまく表している。が、「重りか」から「愈りぞ」までを鉤括弧に入れて訳している点は、頷けない。この段全体は、次のような陰陽周期で紡がれていると目されるのである。

【R】<sup>①</sup>「荻の葉に露ふきむすぶ秋風もゆふべぞわきて身にはしみける」とかきてもそへまほしくおほせと、「さやうなる露ばかりの気しきにももりたらば、いとわづらはしげなるよなれば、はかなきことも、えほのめかしいづまじ。」かくよろづに「なにかば、いかにもゝほかざまに心わけましや。ときのみかどの御むすめを給とも、えたてまつらざらまし。」<sup>②</sup>「さ思人あり」ときこしめしなからは、かゝることなからましを、なほ心うく、わが心みだり給けるはしひめかな<sup>③</sup>と思ひあまりては、又、宮のうへにとりかゝりて、「こひしうもつらくもわりなきことも、おこがましきまでくやしき。」<sup>④</sup>これに思わびてさしつぎには、「あさましくてうせにし人の、いとをさなく、とゞこほるところなかりけるかるゝしさ」をばおもひながら「<sup>⑤</sup>さすがにいみじとものをおもひりけんほど、わがけしきれいならずと心のおにゝなげきしづみてゐたりけんありさま」をき、給しもおもひいでられつ、「<sup>⑥</sup>をもりかなるかたならで、たゞ心やすくらうたきかたらひ人にてあらせむと思ひしには、いとらうたかりし人を。」<sup>⑦</sup>おもひもていけば、「宮をもおもひきこえじ。女をもうしとおもはじ。たゞわががありさまのよづ

かぬをこたりぞ」などがめいり給ときくおほかり。

(大島本「蜻蛉」巻 五五〇〜五六〇)

暴挙であると承知の上で、心内文は全て鉤括弧に入れ(①)〜(⑩)、地の文はゴシック体にした。二重傍線部はいわゆる「主観直叙」もしくは「うつつり詞」の類で、「くと思す」と言い換えて得るもの。この段全体の連絡法を見やすくするため、甚だ奇矯な体裁となつていふことを諒とされたい。

新編日本古典文学全集の現代語訳は、④「むかしのくはしひめかな」と、⑨「をもりかゝ」から⑩「をこたりぞ」までを鉤括弧に入れ、他は、地の文(と薫の心内が半ば一体化したもの)として処理している。しかし、右のように色分けすると、この段全体が、薫の心内文(鉤括弧内)と、「思ふ」「思す」をくり返す地の文(ゴシック体)との交互反復によって彩なされていることが看取されるに違いない。実はこの前にも「といまじうおほいたり」(五四〇)とあり、この後にも「また、おほすまゝに」(五六ウ)とあって、つまり、とめどない薫の煩悶が、「a」と思い、bと思つてはまた、cと思ひ……という形で婉蜒と連なつているのである。いかにも薫らしい、執拗に繚繞する思考がよく表された文体と思われるわけだが、問題の傍線部についていうと、「く人を……」は、心内文の末尾、「おもひもていけば」は、「と思ひあまりては」「これに思わびてさしつぎには」などと同じく、心内文の狭間に表出する地の文、と解することができよう。そして、その「ちうたかりし人を……。」という思念を打ち消すものとして、⑩「女(浮舟)をもうしとおもはじ」という言があるのだとすれば、「人を」の下には「うし」に相当するような述語用言が想定できることとなり、「を」は、先の

【〇】のごとく、いい差しの格助詞と認め得るだろうか。なお判然としない。さらなる検数を要する。

以上、平安和文の気脈をどのように捉えるかという課題のもと、「源氏物語」の会話文・心内文を取り挙げ、その内外に現れる助詞「を」に留意しつつ、新たな本文読解を試みた次第である。考慮の足りぬ点について、教示をいただければ、と思う。

#### 注

(1) 萩原広道「源氏物語評釈」(一八五四年)

佐伯梅友「源氏物語講読」上(下)(武蔵野書院・一九九一〜九二年)

(2) 島津久基「対訳源氏物語講読6」(矢島書房・一九五〇年)

(3) 体言接続の「を」を詠嘆として訳す諸例については、以下の論稿を参照。

松尾聡「格助詞・間投助詞・接続助詞の「を」」(『古典解釈のための国文学入門 改訂増補』研究社・一九七三年)

遠藤和夫「白露の色はひとつを―体言接続の「接続助詞」の「を」の用法を検討―、接続助詞の本質におよぶ―」(『和洋女子大学紀要(第一分冊 文系編)』26・一九八六年三月)

(4) 次の論稿は、当該のくだりに触れながら独自の藤壺論を展開している。

阿部秋生「藤壺の宮と光源氏」1〜2(『文学』一九八九年八月〜九月)

(5) 以上の諸例のうち、二重傍線を付した方の「を」は、「く」に対して・くについて」という意と捉えられようか。いずれも、佐伯梅友「を」(『上代国語法研究』大東文化大学東洋研究所・一九六六年)で挙げられた例であり、前掲注(9)の松尾論稿でも言及されているものである。

○この御ことにふれたることをば、だうりをもうしなはせ給ふ

(大島本「桐壺」巻 一五〇)

○さらぬはかなき事をだにきずをもとむる世に、

(大島本「紅葉賀」巻 一六〇)

○たゞそこはかたなくすぐしつるとし月は、なにごとを<sub>レ</sub>か心を<sub>レ</sub>もなやましけむ、(大島本「明石」巻三七オ)

なお、「<sub>レ</sub>に対して」と解し得る「を」については、以下の論稿も参照。

山崎良幸「助詞」(『古典語の文法』武蔵野書院・一九六六年)

鎌田良二「中古文における助詞」を「<sub>レ</sub>」について―その解釈をめぐって―(『甲南女子大学紀要』8・一九七二年三月)

同「助詞」を「<sub>レ</sub>」について(『辺田博士古稀記念 国語助詞助動詞論叢』桜楓社・一九七九年)

山口明徳「客語意識」(『国語の論理―古代語から近代語へ―』東京大学出版会・一九八九年)

(6) 塚原鉄雄「挿入の修辞」(『国語構文の成分機構』新典社・二〇〇二年)

(7) いずれも、近藤泰弘「日本語記述文法の理論」(ひつじ書房・二〇〇〇年)に所収。

なお、これを承けた以下の論稿も参照。

金水敏「古典語の「<sub>レ</sub>」について」(仁田義雄編「日本語の格をめぐって」くろしお出版・一九九三年)

衣畑智秀「上代語のヲ・モノヲ―その起源をめぐって―」(金水敏代表「平成14年度科学研究費基盤研究(C)(2)研究成果報告書」統合化された言語学・国語学用語集のための基礎的研究」二〇〇三年三月)

(8) 今泉忠義「形容詞性の語の尊敬表現―源氏物語の敬語法一―」(『日本文学論究』16・一九七七年六月)

(9) 佐伯梅友「松風の巻の別離の場面」(『古文読解のための文法』三省堂・一九八八年)

(10) 連体句のかような問題については、例えば、次の論稿を参照。  
今泉忠義「源氏物語の構文―連体的修飾語の用法―」(『国学院雑誌』一九六六年四月)

(11) 山口明徳「を」(松村明編「日本文法大辞典」明治書院・一九七一年)

(12) 天理本(研雲本)の様態と本文については、次の論稿を参照。  
伊井春樹「研雲本『源氏物語』薄雲巻の性格」(『源氏物語論とその研究世界』風間書房・二〇〇二年)

(13) 7行目\*「さ」は「ま(万)」の誤写だろう。8行目\*\*「ながら

は」ではなく「なからば」と解した。9行目\*\*\*「はしひめ」と「はじめ」との異同があり注意される。

(14) 以下の論稿は、島津久基のいう「主観直叙」「客観的移用」、中島広足という「うつり詞」を紹介しながら、心内文と地の文が分かち難く融合する独自の文体について考察している。

石田穰二「注釈についての二三の提言」(『源氏物語攷その他』笠間書院・一九八九年)

秋山虔「うつり詞」ということ(『むらさき』21・一九八四年七月)

池田節子「移り詞」(『別冊国文学 源氏物語事典』一九八九年五月)

※「源氏物語」諸本の本文は、以下の複製・影印に拠った。

▽各筆本(御物本) 〓『御物各筆源氏』(貴重本刊行会)

▽陽明本 〓『陽明叢書国書篇 源氏物語』(思文閣出版)

▽大島本 〓『大島本源氏物語』(角川書店)

▽明融本 〓『東海大学蔵桃園文庫影印叢書 源氏物語(明融本)』(東海大学出版会)

▽歴博本 〓『国立歴史民俗博物館蔵 貴重典籍叢書 文学篇 物語』(臨川書店)

▽保坂本 〓『保坂本源氏物語』(おうふう)

▽天理本(研雲本) 〓『天理図書館善本叢書 源氏物語諸本集』(八木書店)

いずれも、掲出に際して、私に句読点・濁点・鉤括弧を施した。漢字・仮名表記はとのままである。なお、今回は、見せ消し・補入・漢記・句読など、書き入れの一切を無視し、本行本文のみを採用した。

— 国文学研究資料館助教授 —